沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 60 集

沖縄県伊是名村

具志川島遺跡群発掘調査概要報告書

平成 23（2011）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序 文

本概要報告書は、文化庁からの国庫補助を受け、沖縄県伊是名村具志川島に所在する具志川島遺跡群の発掘調査成果の概要をまとめたものです。発掘調査は平成 18（2006）～21（2009）年度にかけて実施しました。

具志川島遺跡群は現在では無人島となった周囲４㎞ ほどの小島にもかかわらず、1960 年代にその存在が知られて以来、1976 年～1980 年、1989 年～1992 年、そして今回、合計３度にわたり発掘調査が実施されています。これまでの発掘調査では、具志川島では縄文時代から弥生～平安並行時代を経てグスク時代に至るまで人類によって利用されつづけてきたことが確認されています。中でも注目されるのは、縄文時代後期と考えられる複数の崖葬墓や県内初と言われた貝輪着装人骨の出土、縄文時代中期と考えられる岩陰での生活跡が検出されたことなどがあり、南西諸島の先史時代を知る上でかかすことのできない遺跡群として知られています。

今回の発掘調査は、採砂工事によって遺跡が抉り取られ、断面が露出してしまった岩立遺跡西区の保存を目的とした発掘調査や、岩立遺跡、親畑貝塚、タチャー遺跡の内容を確認するために実施しました。岩立遺跡西区では隣の岩立遺跡と同様な縄文時代中期の生活跡や縄文時代後期の崖葬墓が確認され、装飾的な貝製品が確認されました。岩立遺跡では縄文時代の崖葬墓がまだ保存されている状況等が確認されました。親畑貝塚では人為的関与も想定される礫集中遺構が確認されました。今回初めて発掘調査を実施したタチャー遺跡では洞穴内から弥生～平安並行時代と考えられる重層的なおびただしい量の炉跡が確認されました。いずれも、沖縄県の先史文化を知る上で重要な成果を得ることができたと考えています。

本概要報告書が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、御指導、御協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成 23（2011）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　守内　泰三

例 言

1　本概要報告書は文化庁の補助（８／10）を受けて実施した具志川島遺跡群の保存を目的とした発掘調査成果の概要をまとめたものである。

2　具志川島遺跡群は沖縄県島尻郡伊是名村具志川島に所在する。

3　発掘調査は平成 18（2006）～21（2009）年度の４次にわたって実施し、資料整理は平成 22（2010）・23（2011）年度に実施している。

4　本概要報告書に掲載した座標軸は国土座標軸（第ＸＶ座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。

5　本報告書は又吉純子の協力を得て片桐千亜紀が編集・執筆した。

6　本概要報告書に掲載した出土遺物の撮影は矢船章浩、伊佐えりなが行った。

7　発掘調査で出土した遺物や現場の実測図・写真、資料整理で作成した実測図や写真等の記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

序文
例言

Ⅰ　はじめに……1
調査に至る経緯……1
調査体制……1
調査経過……2

Ⅱ　具志川島の位置と環境……3

Ⅲ　調査略史……5

Ⅳ　調査概要……8
1.遺跡群の位置と概要……8
2.岩立遺跡西区……11
3.岩立遺跡……17
4.親畑貝塚……19
5.タチャー遺跡……20
6.その他……23

Ⅴ　まとめ……24

報告書抄録

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

具志川島は沖縄本島の北西洋上、伊是名島と伊平屋島の中間に位置する無人島である。1970 年代前半、1975 年に開催された沖縄国際海洋博覧会に先立って、盛んに実施された採砂工事によって、島の西側一帯の砂丘が削り取られた。この時、多くの遺跡が破壊された。この採砂工事が契機となって、1975 年より沖縄県教育委員会によって島の分布調査が実施され、多数の遺跡が確認された。しかし、多くの遺跡は損傷を受けており、削り取られた砂丘の断面にその包含層が露出する状況であった。その後、伊是名村教育委員会が主体となって 1976 年～1980 年、1989 年～1992 年のⅡ期にわたって発掘調査が実施された。

平成 17 年度（2005 年）に沖縄県立埋蔵文化財センターが具志川島の現状を確認した際、岩立遺跡西区と呼ばれる遺跡断面が露出し、風雨に晒され自然崩壊の危機を迎えていることが確認された（写真１・２）。

このことから、岩立遺跡西区の保護措置が緊急課題となり、併せて遺跡群の内容も確認するための保存目的発掘調査を国庫補助を受けた沖縄県教育委員会が主体となって実施することとなった。

２．調査体制

事業形態　文化庁国庫補助事業
事業主体　沖縄県教育委員会
事業所管　沖縄県教育庁文化課
事業実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
　　所長　田場 清志、名嘉 政修、玉栄 直、守内 泰三
　　調査班　班長　岸本 義彦、金城 亀信
　　調査員　片桐 千亜紀、西銘 章、新垣 力、中山 晋、仲座 久宜
　　文化財調査嘱託員　伊藝 由希、伊藤 圭、伊波 直樹、上原 沙香、大城 歩、
　　大堀 皓平、岸本 竹美、小橋川 剛、菅原 広史、瑞慶覧 長順、
　　天願 瑞笑、徳嶺 里江、長嶺 優、仲村 毅、比嘉 尚輝、
　　本村 麻利衣、山田 浩久
調査協力　伊是名村教育委員会
　　沖縄県立博物館・美術館　藤田 祐樹、山崎 真治
　　沖縄県教育庁文化課　久高 健
調査指導・助言
　安里 嗣淳（元沖縄県立埋蔵文化財センター）、伊藤 慎二（國學院大學）、
　上村 俊夫（鹿児島国際大学）、神谷 厚昭（金城町石畳文化研究所）、河名 俊男（琉球大学）、
　黒住 耐二（千葉県立中央博物館）、崎原 恒寿（恩納村博物館）、篠田 謙一（国立科学博物館）、
　新里 貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）、高宮 広土（札幌大学）、
　竹中 正巳（鹿児島女子短期大学）、土肥 直美（琉球大学医学部）、樋泉 岳二（早稲田大学）、
　中橋 孝博（九州大学）、中村 愿（北谷町教育委員会）、禰冝田 佳男・水ノ江 和同（文化庁）、
　米田 穣（東京大学）
業務委託
　パリノ・サーベイ株式会社
　有限会社　北部測量設計
　有限会社　ワールド設計
　有限会社　文化財サービス
　株式会社　イーエーシー

３．調査経過

発掘調査は平成 18～21 年度まで４次にわたって実施し、総発掘日数は 71 日に及ぶ。無人島という環境のため、遺跡見学は困難を極めるが、伊是名村教育委員会の協力のもとで、小学生を対象とした現地見学会を３回、一般を対象とした現地説明会を１回、伊是名村にてシンポジウムを１回開催した。調査経過は以下のとおりである。

平成 18 年度　８月５日～９月５日　（15 日）
　岩立遺跡西区、小学生対象の現地説明会実施
平成 19 年度　５月８日～６月 29 日　（25 日）
　岩立遺跡西区・岩立遺跡、小学生対象の現地説明会実施
平成 20 年度　５月７日～７月３日　（23 日）
　岩立遺跡西区・岩立遺跡・親畑貝塚・タチャー遺跡
　小学生対象の現地説明会、一般対象の現地説明会・シンポジウム実施
平成 21 年度　６月２日～12 日、７月 14 日～16 日　（８日）
　岩立遺跡西区・岩立遺跡・親畑貝塚・タチャー遺跡
平成 22 年度
　資料整理・概要報告書刊行

1　調査前の状況

2　調査風景

Ⅱ　具志川島の位置と環境

具志川島は沖縄県伊是名村に所在する無人島である。沖縄本島北部の北西洋上、北の伊平屋島と南の伊是名島の中間に位置する。東西約 1.9㎞、南北約 350ｍ、周囲約４㎞、面積 0.42 ㎢、高所 27.6ｍ、平らで東西に長い小島である（第１図・写真３～５）。湧き水が島の東北側にある。島の東側を最高所として丘陵が東西にはしり、その周囲に砂丘が形成されている。砂丘は島の西側が特に発達しており、南北を繋いでいたが、西側一帯の砂が採砂工事によってほとんど抉り取られたために、旧地形はとどめていない。地形・地質の詳細については大城（1977）が詳しいため、省略する。

1970 年（昭和 45 年）までは数軒の民家と小学校もある有人島であったが、３月 31 日に廃校となり、現在は無人島となっている。採砂工事によって損傷を受けたが、40 年の月日によって、島中に植物が生い茂り、民家や小学校も密林の中に埋もれている。発達したリーフに囲まれ、野生と化した山羊やウサギが闊歩するのどかな島である。

3　具志川島（南から）

4　具志川島（北から）

5　具志川島遠景（北側海上から）

第１図　具志川島の位置

Ⅲ　調査略史

具志川島では、まだ有人島であった 1960 年代に遺跡の存在が紹介された（高宮 1966）。その直後、採砂工事が契機となって実施された沖縄県教育委員会による分布調査の結果、島内で 16 ヶ所に及ぶ多数の遺跡が確認された。これらは具志川島遺跡群と呼ばれ、その後、今回を含め、Ⅲ期にわたって発掘調査が実施されている。ここでは、伊是名村教育委員会が 1976 年～1980 年まで主体となって実施した発掘調査を第Ⅰ期、沖縄県と伊是名村教育委員会が 1989 年～1992 年まで主体となって実施した発掘調査を第Ⅱ期、沖縄県教育委員会が 2006 年～2009 年まで主体となって実施した今回の発掘調査を第Ⅲ期と呼ぶ。

発掘調査開始までの経緯

1960 年代、高宮廣江氏が具志川島で初めて「親畑貝塚」を紹介した（高宮 1966）。

1970 年代前半、1975 年に開催された沖縄国際海洋博覧会に先立って、沖縄本島において開発が盛んに行われた。具志川島でも大規模な採砂工事が実施され、島の西側一帯の砂丘が大規模に抉り取られた。この時、多くの遺跡が破壊されたと考えられる。

1975 年、採砂工事が契機となり沖縄県教育委員会によって具志川島の遺跡分布調査が実施された。抉り取られた砂丘や岩陰の断面観察によって、多数の遺跡が確認された。その数は 16 ヶ所に及び、沖縄先史時代の様々な時期にわたる多量の遺物が回収された（伊是名村教育委員会 1977）。

第Ⅰ期　発掘調査（1976 年～1980 年）

伊是名村教育委員会では突如として現れた具志川島遺跡群の実態を把握するため、沖縄県教育委員会の協力のもと、４年にわたる発掘調査が実施された（1979 年は一端調査中止）。この調査では、分布調査の追加、岩立遺跡・西地点・親畑貝塚の３遺跡が対象となる（伊是名村教育委員会 1977・1978・1979・1981）。岩立遺跡の調査によって、前Ⅲ期前半の生活跡（写真６）や標識となる土器群（面縄前庭Ⅰ～Ⅲ式）の型式設定と編年、前Ⅳ期の崖葬墓が確認された（写真７）。崖葬墓からは、丁寧に再葬された人骨（写真８）や県内初の貝輪着装人骨（写真９）が検出されている。西地点の調査によって、弥生～平安並行時代における尖底土器とくびれ平底土器の新旧関係が確認された。親畑貝塚（写真 10）では前Ⅳ期の包含層と集石遺構（写真 11）が確認された。

第Ⅱ期　発掘調査（1989 年～1992 年）

第１次は沖縄県教育委員会が主体となり、第２～４次は伊是名村教育委員会が主体となって第Ⅱ期発掘調査が実施された。この調査は沖縄国際大学と鹿児島大学の考古学研究室が全面的に協力した。

岩立遺跡・西地点・親畑貝塚の３遺跡の継続調査、新しく岩立遺跡西区・南地点の２遺跡を加えた計５箇所が対象となる（伊是名村教育委員会 1993）。岩立遺跡西区においても、岩立遺跡同様の前Ⅳ期と考えられる崖葬墓が存在することが確認された。西地点でも弥生～平安並行時代と考えられる崖葬墓が確認された（写真 12）。南地点では前Ⅳ期と考えられる礫敷遺構が確認された（写真 13）。第Ⅰ期発掘調査の９年後のことである。

第Ⅲ期　発掘調査（2006 年～2009 年）

沖縄県教育委員会が主体となって第Ⅲ期発掘調査を沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。岩立遺跡・岩立遺跡西区・親畑貝塚の他、新たにタチャー遺跡（９地点）を対象とした。自然崩壊の危機に瀕している岩立遺跡西区を中心としつつ、遺跡群の保存と内容確認を目的とした。調査概要は次章を参照。第Ⅱ期発掘調査から 13 年度のことである。

6　焼石遺構（第Ⅰ期岩立遺跡）

7　人骨検出状況（第Ⅰ期岩立遺跡）

9　貝輪着装人骨（第Ⅰ期岩立遺跡）

8　再葬された人骨（第Ⅰ期岩立遺跡）

10 親畑貝塚遠景（第Ⅰ期）

11 集石遺構（第Ⅰ期親畑貝塚）

12 崖葬墓（第Ⅱ期西地点）

13 礫集中（第Ⅱ期南地点）

Ⅳ　調査概要

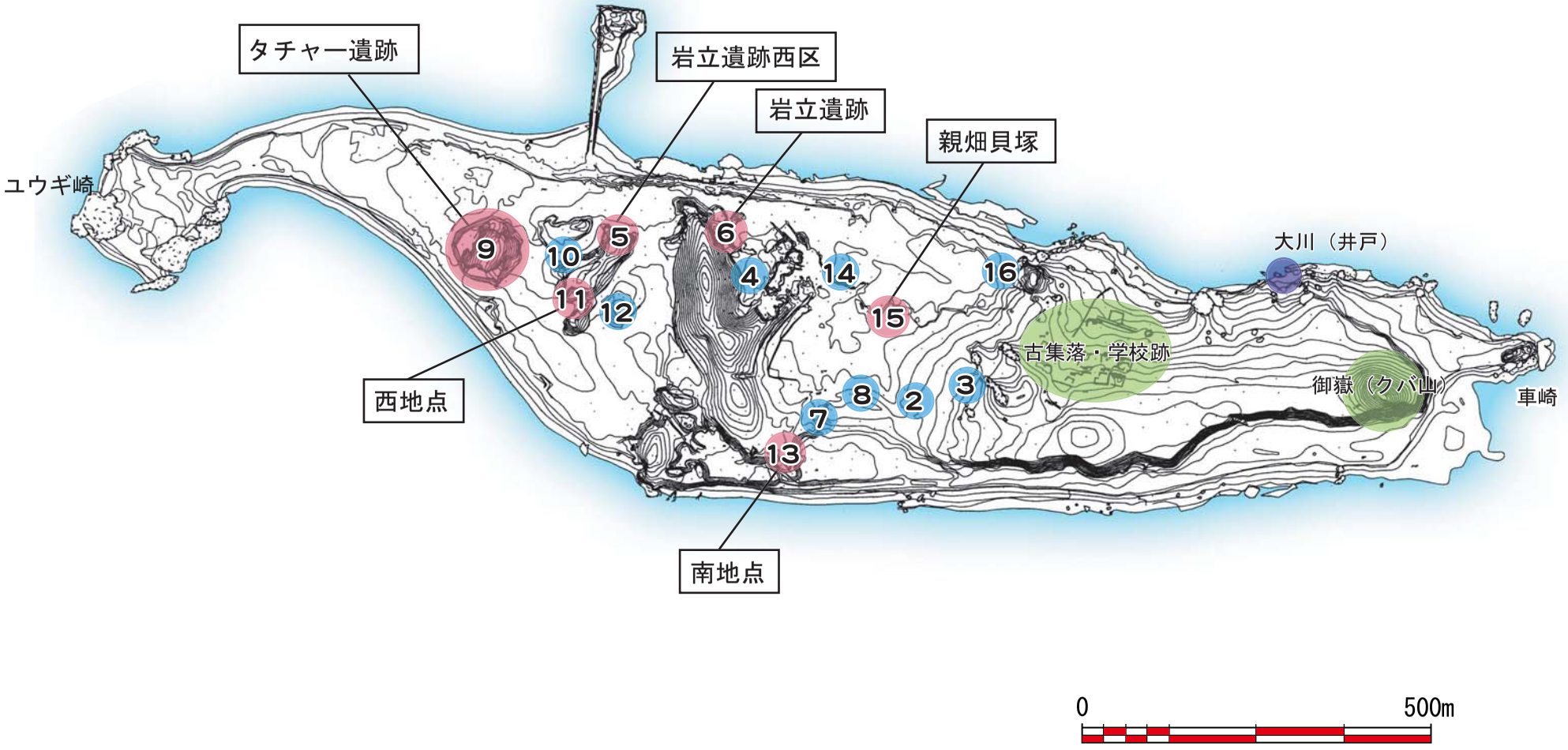
１．遺跡群の位置と概要

具志川島では、これまでに実施された調査成果によって、16 箇所で遺跡が確認されている（第２図）。現在は腐葉土がたまり密林となっているため、明確な場所が確認できたのはこれまでに発掘調査が実施されている岩立遺跡（６地点）、岩立遺跡西区（５地点）、親畑貝塚（15 地点）、西地点（11 地点）、南地点（13 地点）と、今回初めて発掘調査を実施したタチャー遺跡洞穴１・２（９地点）の６箇所だけであった。

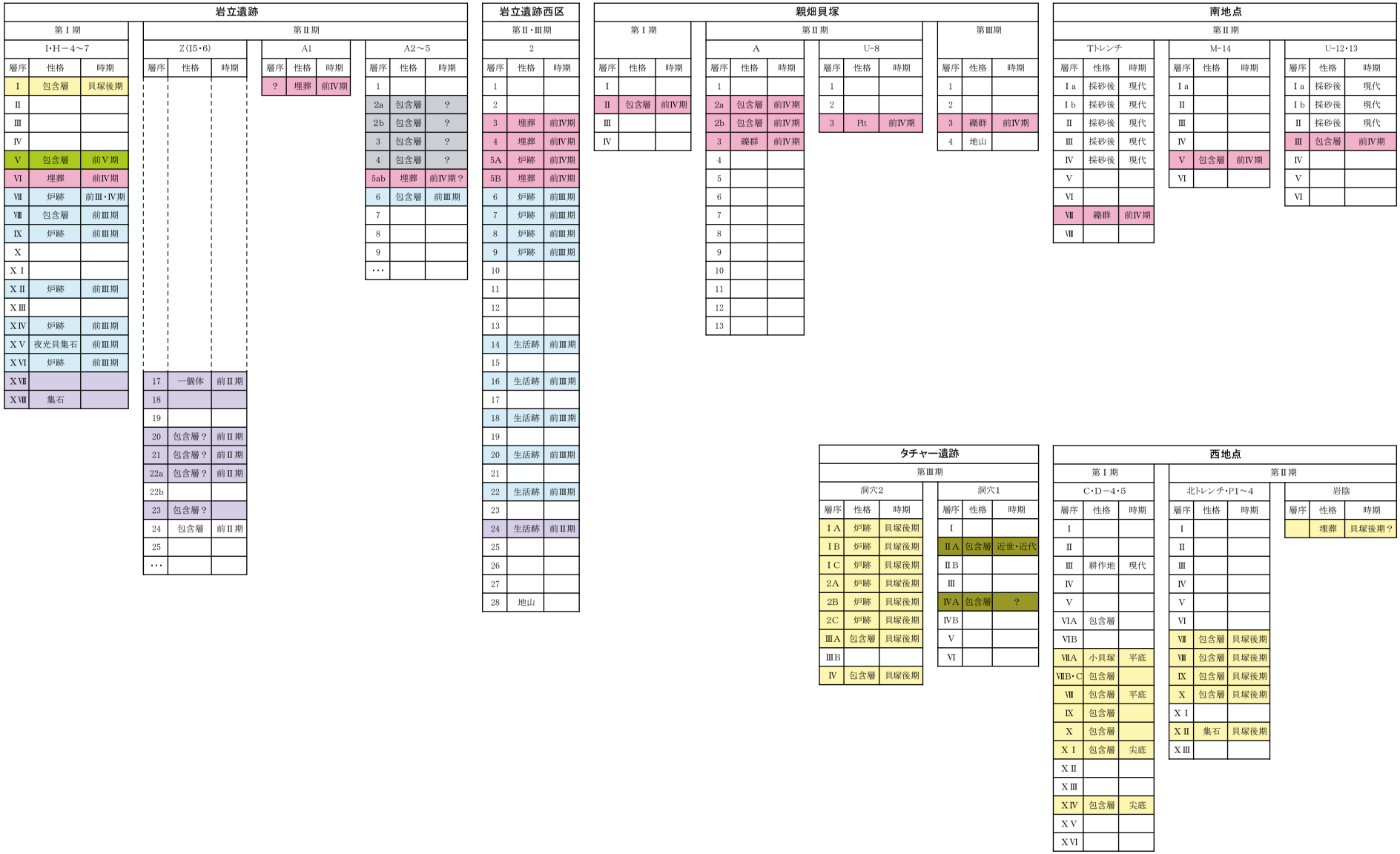
第１表は具志川島遺跡群の概要を時期別にまとめたものであり、第３図は遺跡の層序の概要をまとめたものである。縄文時代は 11 箇所、弥生～平安並行時代は 10 箇所、グスク時代は３箇所。近世・近代は２箇所で確認されている。先史時代からグスク時代までのほぼ全時代にわたって、この島が利用されていることがわかる。ただし、時期によって島の利用には盛衰があり、前Ⅲ期～前Ⅳ期前半が最も利用された。その後の前Ⅳ期後半はまったく利用されておらず、前Ⅴ期は再び僅かながら利用され、そして弥生～平安並行時代の前半に再び利用されなくなり、弥生～平安並行時代後半からまた利用されはじめる。さらに、グスク時代の遺物もわずかながら確認されているため、遺跡が存在する可能性は高い。

第１表　具志川島遺跡群の様相

時代（遺跡数）		性格（遺跡数）	遺跡	遺構	遺物	特徴
縄文時代（11）	前Ⅱ期（4）	包含層（1）	岩立遺跡		条痕文系	
		表採（4）	岩立遺跡、岩立遺跡西区、12･16地点		神野B式、条痕文系	表採や撹乱層からの出土のみ。
	前Ⅲ期（4）	生活跡（2）	岩立遺跡、岩立遺跡西区	炉跡、サザエ蓋集中遺構 集石遺構	面縄前庭式、貝製品	形式設定、編年の指標。 岩陰での生業。
		包含層（1）	親畑貝塚		面縄前庭式、貝製品 石器	
		表採（1）	16地点		面縄前庭式、石器	
	前Ⅳ期（10）	崖葬墓（2）	岩立遺跡（2箇所）、 岩立遺跡西区	風葬、単葬、再葬、火葬等	平底	集団墓。3箇所で確認。貝輪着装人骨。
		包含層（2）	親畑貝塚、南地点	集石遺構、礫敷遺構	仲泊、嘉徳Ⅰ･Ⅱ、面縄東洞 神野D、伊波系、貝製品	最も多くの遺跡で確認。荻堂式･大山式･室川式を含まない。前Ⅳ期前半を代表。
		表採（6）	2･3･7･8･9･16地点		仲泊、嘉徳Ⅰ･Ⅱ 面縄東洞、伊波系、石器	
	前Ⅴ（3）	包含層（2　）	岩立遺跡、親畑貝塚		宇座浜、カヤウチバンタ	数量は少ない。
		表採（1）	16地点		宇座浜、カヤウチバンタ 石器	数量は少ない。
弥生～平安並行時代（10）		崖葬墓（1）	西地点	風葬		幼児骨のみ。
		生活跡（1）	タチャー遺跡洞穴2	炉跡	フェンサ下層	洞窟内
		包含層（1）	西地点		大当原、アカジャンガー、 スセン當、フェンサ下層 貝製品、石器	大当原式･アカジャンガー式･フェンサ下層式土器等が主体。後期前半と考えられる仲原式･阿波連浦下層式･浜屋原式を含まない。後期後半を代表。
		表採（9）	南地点、3･4･8･9･10･12･14･16地点		弥生系	
グスク時代（3）		表土（3）	西地点、4･8地点		グスク土器、類須恵器 青磁	表土から出土。 その他、表採される。
		表採	海岸		青磁	
近世･近代（1）		包含層	タチャー遺跡洞穴1		沖縄産陶器･簪･キセル 獣骨	洞穴前庭部
		表採	海岸		陶磁器	北岸に集中


タチャー遺跡
岩立遺跡西区
岩立遺跡
親畑貝塚
ユウギ崎
大川（井戸）
古集落・学校跡
御嶽（クバ山）
車崎
西地点
南地点
9
10
5
6
11
12
4
14
15
16
8
2
3
7
13
0
500m

第２図　具志川島遺跡群



第３図　具志川島遺跡群発掘調査区層序の概要

２．岩立遺跡西区

2006 年～2009 年まで 4 次にわたって発掘調査を実施した。第Ⅱ期発掘調査では第３・４層の崖葬墓の発掘調査が中心となっていた。今回は５層～12 層及び 24 層～地山である 28 層まで発掘調査を実施した。本遺跡は複数の包含層からなる岩陰に形成された複合遺跡である（写真 14・15)。

２基並んだ炉跡（前Ⅳ期）

３・４層崖葬墓の直下、５Ａ層で炉跡が２基並んだ状態で確認された（写真 16)。人骨を伴うものではなく、わずかの貝類と土器片が確認された。

崖葬墓（前Ⅳ期）

５Ａ層炉跡の検出によって、崖葬墓は終わったと思われたが、さらに下層の５Ｂ層で再び崖葬墓が確認された（写真 17～21)。十数体分の人骨が検出されたが、解剖学的な位置関係は保っておらず、岩陰の中でもさらに壁際を意識して集骨された状態である（写真 22・23)。ただし、岩陰の壁際ではなく、比較的手前側で大腿骨と寛骨が関節した状態で検出された例がある（写真 24)。このことは、岩陰手前側に一次葬段階の被葬者が安置されていたことを示していると考えられ、骨化後、さらに岩陰壁際に集骨されたのだろう。その行為がやや雑であったため、このように、大腿骨と寛骨のみが関節した状態で残されたのだと考えられる。

このような人骨の検出状況から、この岩陰では被葬者を土や砂に埋めて埋葬する葬法ではなく、岩陰手前の露出した環境で被葬者を安置して風葬を行い、骨化させた後、岩陰壁際に人骨を集骨するという葬法が取られていたことが推測される。このような葬法は本遺跡の３・４層や隣の岩立遺跡でも行われていたと考えられる。ただし、岩立遺跡では火を利用する葬法が行われていたことがわかっており（木下・中村 1079、片桐ほか 2008)、岩立遺跡西区より複雑である。

重層的な炉跡・焼石遺構・サザエの蓋集中遺構・貝塚（前Ⅲ期）

６層～12 層、24 層で多数の炉跡や焼石遺構・サザエの蓋集中遺構が確認された（写真 26～33)。また、小規模な貝塚が壁際で確認された（写真 35・36)。このような生活跡は無遺物層を挟みながら６層～24 層まで確認される（写真 37)。この岩陰が短期的に繰り返し利用されていたことを示す。このような状況は隣の岩立遺跡でも確認されており、複数の集団が同時に利用したのか、同じ集団が時期を変えて利用したのか、両者の関係についてはさらなる検討が必要である。

14 近景

15 壁面

16　5A層 2基並んだ炉跡

18　5B層 人骨検出状況

19　5B層 人骨検出状況

17　5B層 崖葬墓の状況

20　5B層 人骨検出状況

21　5B層 人骨と貝製品検出状況

22　5B層 岩陰に寄せられた人骨

23　5B層 人骨検出状況最終面

24　5B層 大腿骨と寛骨の間接状況

25　調査風景

26　6層～9層 重なり合う炉跡

27　6層 厚く堆積する炉跡

28 6層下 焼石遺構と炉跡・小貝塚の配置

29 24 層 2基並んだ焼石遺構

30 9層 サザエの蓋集中遺構

31 12 層 炉跡と焼けたサザエの蓋集中

32 12 層 焼けたサザエの蓋集中遺構に混入する食糧残滓

33 18 層 壁面に露出したサザエの蓋集中遺構

34　9層 ヤシガニ？検出状況

35　6層下 壁際に形成された貝塚

36　6層下 壁際に形成された貝塚

37　6層～ 22 層 堆積状況

38　調査風景

39　調査終了状況

出土遺物

土器はほとんど小破片となっている。前Ⅳ期の崖葬墓から面縄前庭系や仲泊系の小破片が確認されているが、それらは、下層からの混入と考えられる。前Ⅲ期の層からは面縄前庭系の土器が主体的に確認されている。22 層より条痕文系の土器片が１点確認された。本遺跡では表採によって、神野Ｂ式土器も確認されていることから、ほぼ未調査である最下層付近は前期Ⅱ期に遡る時期である可能性は高い。（写真 40）

貝・骨製品は前Ⅳ期と考えられる崖葬墓から貝輪や４箇所の透かし彫りが施された装飾的な貝製品等が確認されたが、このような副葬品は少量である。特に貝輪は３・４層から多数確認されているが、今回発掘を実施した５Ｂ層からは未確認であり、その内容に明確な差がある。前Ⅲ期の層からは骨製品等も確認されている。（写真 41）

前Ⅲ期の生活跡を発掘したにもかかわらず、石器はほとんど確認されなかった。僅かに確認された石器は磨石と剥片のみである（写真 42）。

40 土器

41 貝・骨製品

42 石器

３．岩立遺跡

岩立遺跡は第Ⅰ・Ⅱ期発掘調査によって、２箇所の岩陰で崖葬墓が確認されている（写真 43)。便宜的に第Ⅰ期発掘調査で確認された崖葬墓の調査区を岩陰１（写真 44)、第Ⅱ期発掘調査で新しく確認された崖葬墓の調査区を岩陰２（写真 45）と呼ぶ。2007 年～2009 年の３次にわたって発掘調査を実施、第Ⅱ期発掘調査で実施された岩陰２Ａグリッドの詳細な位置・層序の確認及び岩陰１Ｚグリッドの試掘調査を進めた。

Ａグリッドでは第Ⅱ期発掘調査で確認された崖葬墓を再び検出し、人骨の回収を行った（写真 46)。岩陰の崩落が激しく、大規模な安全対策を施さなければそれ以上調査を進めることは危険がともなったため、崖葬墓の範囲を確認することは諦めざるを得なかった。

Ｚグリッドでは第 29 層まで試掘を進めたが、それ以上を確認することは時間的に困難であった（写真 47～49)。出土遺物は 25・26 層より曽畑系の土器片が１点、表採によって条痕文系と考えられる土器片１点、仲泊系と考えられる土器片１点が確認された（写真 50)。今回の調査でも、岩立遺跡の最下層は確認することができなかったが、露出する壁面より下層にはまだまだ遺物包含層が保存されていることが確認された。

43 近景

44 遺跡の現状

45 5層　人骨検出状況

46　5層 下顎骨検出状況

47　堆積状況

48　試掘坑

49　調査風景

50　出土遺物

４．親畑貝塚

2008・2009 年の２次にわたって親畑貝塚の試掘調査を実施した（写真 51）。具志川島ではこれまで岩立遺跡２箇所と岩立遺跡西区１箇所の計３箇所の岩陰で前Ⅳ期と考えられる崖葬墓が確認されているが、この崖葬墓を営んだ集団の住居跡等が不明であった。これまでの発掘調査では親畑貝塚と南地点においてそれぞれ、集石遺構や礫敷遺構が確認されているが、明確な生活跡とは認識されていない。このため、今回は親畑貝塚に焦点をあてて、試掘調査を実施した。しかし、包含層より土器片は確認されるものの、明確な住居跡を確認することはできなかった。ただ、試掘坑 No. 28 からはこれまで周辺では確認されてこなかった大型の礫が面的に広がる状況が確認された（写真 52・53）。その上部には黒褐色土が確認され、少量の伊波系・面縄西洞式と考えられる土器片が得られた（写真 54）。調査面積が少なかったため、この礫群が人為的な関与であることを裏付ける明確な証拠を提示することは困難であるが、周辺でこのような礫が集中する状況が確認されていないこと、礫のみが流れ込むべき丘陵も存在しないこと、礫群の上部に遺物包含層である黒褐土が存在することから、遺構である可能性は高いと考えられる。

51　近景

52　礫群検出状況

53　礫群検出と堆積状況

54　出土遺物

５．タチャー遺跡

2008・2009 年の２次にわたり、今回具志川島で初めて発掘調査を実施した。独立丘陵状を呈し、これまでは９地点として、弥生系土器等が表採された場所として知られる。表採された明確な場所はわからなかったが、２箇所で小規模な洞穴が確認され、それぞれ洞穴１（写真 55）、洞穴２（写真 56・57）として調査を実施した。

55 洞穴1 近景

56 洞穴2 遠景

57 洞穴2 近景

洞穴１

洞穴内１箇所、洞穴前庭部で１箇所の試掘調査を実施した。遺構等は確認されなかったが、沖縄産陶器壺や碗、簪、キセル、獣骨等の近世・近代遺物が出土した（写真 58～60）。詳細な性格は不明であるが、この独立丘陵は拝所や近世・近代の風葬墓が存在するため、あるいはこれらに伴う遺物の可能性がある。

58　ⅡA層 遺物検出状況1

59　ⅣA層 遺物検出状況2

60　出土遺物

洞穴２

洞穴内中央部で１箇所試掘調査を実施した（写真 61）。1.4m以上の掘削を行い、下部では風性と考えられる砂層に黒褐色砂層が存在すること、上部は重層的なおびただしい量の炉跡が厚く確認された（写真 62・63・65）。炉跡の保存状態は極めて良好で、燃焼面、灰の堆積状況等を細かく観察することが可能である。マガキ貝が多く（写真 64）、サザエ、シャコ貝破片が確認される。人工遺物はほとんど確認されていないため、詳しい時期の同定は困難だが、フェンサ下層式と考えられる土器が確認されているため（写真 68）、この時期の炉跡だと推定される。犬と考えられる骨（写真 65）や人骨も確認された。

61　試掘坑の位置

62　重層的な炉跡の堆積

63　シャコガイと焼土面検出状況

64　マガキガイ検出状況

65　重層的な炉跡と犬骨

66　調査風景1

67　調査風景2

68　出土遺物

６．その他

具志川島は北岸を中心として（写真 69)、青磁や近世・近代の陶磁器の散布が認められる。これらは、北岸を港として利用していた結果、残されることになった遺物と考えられる（写真 70)。グスク時代から近世・近代に至るまでヒトによって利用されていたことを示す。

また、東側丘陵には学校跡や集落跡、タチャー遺跡には拝所や風葬墓の跡が密林の中に埋もれるように残されている。

69 北側海岸

70 近世・近代遺物

Ⅴ　まとめ

平成 18（2006）～21（2009）年度の４次にわたり具志川島遺跡群の発掘調査を実施した。過去に実施された発掘調査をそれぞれ第Ⅰ・Ⅱ期とすれば、今回は第Ⅲ期にあたる。これまでの調査の結果、16 箇所で遺跡が確認されている。その内、岩立遺跡、岩立遺跡西区、親畑貝塚、西地点、南地点、タチャー遺跡の６箇所で発掘調査が実施された。

具志川島で確認されている最も古い土器文化は神野Ｂ式等の前Ⅱ期を代表する土器である。岩立遺跡では包含層も確認され、その他４箇所で土器が表採されている。

前Ⅲ期は面縄前庭様式に代表され、島北側の４箇所で確認されている。この内、岩立遺跡と岩立遺跡西区では岩陰から煮炊きをおこなったと考えられる炉跡や石蒸料理を行ったと考えられる焼石遺構チョウセンサザエの蓋集中遺構、小規模な貝塚等が確認されており、岩陰で生活を行っていたことが明確である。チョウセンサザエの蓋のみが集められた遺構は例がなく、類似したものとしては、渡嘉敷島の阿波連浦貝塚で確認されたヤコウガイの蓋集積遺構のみである（高宮他 1999）。

前Ⅳ期は遺跡の数が一気に増え、10 箇所で確認されている。仲泊式・面縄東洞式・嘉徳式・神野Ｄ・伊波系等の前Ⅳ期前半を代表する土器が主体となる。荻堂式や室川式が確認されないため、後述する前Ⅴ期との間に島の利用の断絶がある。

分布範囲も前Ⅲ期までは島の北側に限定されていたものが、南側にも展開するようになる。崖葬墓が３箇所（岩立遺跡２箇所、岩立遺跡西区１箇所）で確認され、多数の人骨が検出された。しかし、住居跡等の明確な生活跡が確認されていない。今後の大きな課題である。

崖葬墓の性格は狭い岩陰を利用して形成された集団墓地で、人骨のほとんどは解剖学的な位置関係を保っていないが、まれに位置関係を保つ人骨が確認される。葬法は、基本的には遺体を岩陰手前に安置して骨化させる風葬と考えられ、骨化した骨を二次的に動かして再葬している。新しい死者ができると岩陰に風葬し、すでに骨化している骨を順次まとめていったものと考えられる（木下・中村 1979）。第Ⅲ期調査では、４箇所の透かし彫りが施された装飾的なイモガイ製品が確認されており、その装飾は県内でも類例を見ない。

前Ⅴ期は前Ⅳ期後半に遺跡が断絶した後、再び利用される時期である。前Ⅳ期前半と比較して遺跡数が３箇所に減少し、表採資料や包含層からカヤウチバンタや宇座浜式土器がわずかに確認される程度である。わずかな痕跡であるが、具志川島に対して何らかのアプローチがあったことは確かである。あるいは、台地上に集落を作るこの時期の立地どおり、未だ発掘調査の手が入っていない島東側の台地に明確な遺跡が存在する可能性もある。

弥生～平安並行時代になると、具志川島では前Ⅳ期と同じ 10 箇所で遺跡が確認される。底部が尖底となる大当原式土器や平底となるアカジャンガー式、フェンサ下層式土器等の後期後半の土器が主体を占める。しかし、弥生～平安並行時代の前半に相当する土器は確認されないため、前Ⅴ期後半から一時期断絶していた可能性が高い。第Ⅲ期発掘調査ではタチャー遺跡の洞窟内において、いくつも重なり合った炉跡が確認された。また、西地点では幼児骨のみの崖葬墓が確認されている。

グスク時代の遺跡は確認されていない。しかし、表採等によってグスク土器や類須恵器、中国産陶磁器が確認されることから、島に対する何らかのアプローチがあったことは確実である。未だ調査が足りない東側丘陵に当該時期の遺跡が存在する可能性は高い。

近世・近代に至っても、この島は利用されていた。島の北岸を中心に陶磁器が散乱し、島東側丘陵には集落が、島西側のタチャー遺跡には拝所や崖を利用した風葬墓が存在する。

以上、具志川島遺跡群の概要をまとめた。具志川島は周囲４㎞ほどの小島である。このような島が南西諸島先史人によって、複数の墓を営むほど利用されたことは大きな驚きである。島の南北にはより大きな伊是名島・伊平屋島がある。島の資源量を考えても、より大きな島のほうが多くの資源を獲得できる環境であることは明白である。しかし、具志川島は利用された。立地条件良好な小さな島ま

でも利用するということ、そこに、島嶼地域で生きる先史人達の生存戦略が隠されていると考えられる。今後、さらに資料整理・研究を進めることによって、島嶼地域で生きた先史人達の生業を解明する手がかりを得られるようになるだろう。

71　伊是名小学校対象の現地見学会

72　伊是名小学校対象の現地見学会

【参考文献】

伊是名村教育委員会 1977　『具志川島遺跡群』　伊是名村文化財調査報告書第１集

伊是名村教育委員会 1978　『具志川島遺跡群』　伊是名村文化財調査報告書第２集

伊是名村教育委員会 1979　『具志川島遺跡群』　伊是名村文化財調査報告書第３集

伊是名村教育委員会 1981　『具志川島遺跡群』　伊是名村文化財調査報告書第６集

伊是名村教育委員会 1993　『具志川島遺跡群』　伊是名村文化財調査報告書第９集

大城逸郎 1977　「伊是名村具志川島の地形・地質」『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第１集　伊是名村教育委員会

伊藤慎二 2000　「第３章　第二節　分布域縮小型土器群の研究」『琉球縄文文化の基礎的研究』小林達雄監修【未完成考古学叢書】

伊平屋村教育委員会 2000　『伊平屋村の遺跡』　伊平屋村文化財調査報告書第３集

片桐千亜紀・小橋川剛・島袋利恵子・土肥直美 2008　「具志川島岩立遺跡出土人骨の再整理」『紀要　沖縄埋文研究５』沖縄県立埋蔵文化財センター

木下尚子・中村愿 1979　「Ⅲ埋葬習俗の検討」『具志川島遺跡群』　伊是名村文化財調査報告書第３集　伊是名村教育委員会

高宮廣衛 1966　「貝塚時代の伊是名」『伊是名村誌』伊是名村

高宮廣衛・安里嗣淳 1986　「具志川式土器」『南島考古』No. 10　沖縄考古学会

高宮廣衛・中村愿・知花一正・山城安生・玉城京子・山城直子・西久保淳美 1999　「渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告」『沖国大考古』第 12 号　沖縄国際大学文学部考古学研究室

高宮広土 1997　「ヒトはいつごろ沖縄諸島に適応したか」『南島考古』No. 16　沖縄考古学会

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おきなわけんいぜなそん ぐしかわじまいせきぐんはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書 名	沖縄県伊是名村 具志川島遺跡群発掘調査概要報告書
副 書 名	
巻 次	－
シ リ ー ズ 名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第60集
編 著 者 名	片桐千亜紀
発 行 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 Tel098-835-8752
発 行 年 月 日	2011年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
ぐしかわじまいせきぐん 具志川島遺跡群	おきなわけん 沖縄県 いぜなそん 伊是名村 ぐしかわじま 具志川島	47360		26° 58′ 29″	127° 57′ 5″	2006. 8. 5 ～ 2009. 7. 16	40㎡	保存目的

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩立遺跡西区	生活跡・墓	縄文時代	崖葬墓、炉跡、 焼石遺構、貝塚、 サザエの蓋集中遺構	土器、石器、貝製品、骨製品、 貝類遺体、脊椎動物遺体、人骨	
岩立遺跡	生活跡・墓	縄文時代	崖葬墓	土器、貝製品、人骨	
親畑貝塚		縄文時代	礫集中遺構	土器、貝類遺体、脊椎動物遺体	
タチャー遺跡	洞穴1包含層	近世・近代		沖縄産陶器、簪、キセル、 貝類遺体、脊椎動物遺体	
	洞穴2生活跡	弥生～平安 並行時代	炉跡	土器、貝類遺体、脊椎動物遺体	

要約	具志川島遺跡群は沖縄県伊是名村に所在する無人島である。 文化庁からの国庫補助を受け、 平成 18(2006)～21(2009)年度の4次にわたり、具志川島遺跡群の保存目的のための発掘調査を実施。 発掘調査対象は岩立遺跡西区、 岩立遺跡、 親畑貝塚、 タチャー遺跡の4ヶ所。 岩立遺跡西区では縄文時代の岩陰生活跡や崖葬墓を確認した。 岩立遺跡では縄文時代の崖葬墓と下層に保存状態良好な文化層が存在することを確認した。 親畑貝塚では礫が集中する遺構と包含層を確認した。 タチャー遺跡では、 洞穴1で近世・近代の包含層を洞穴2で弥生～平安並行時代の重層的な炉跡を確認した。

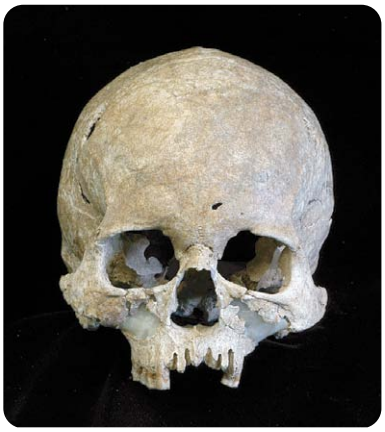
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 60 集

沖縄県伊是名村

具志川島遺跡群発掘調査概要報告書

発行年　平成 23（2011）年 3 月 31 日
発行者　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
TEL　098（835）8752
印　刷　株式会社　尚生堂
〒901-2114　沖縄県浦添市安波茶 1-6-3
TEL　098（876）2232

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2011　prited in japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。



岩立遺跡西区